

「苦しみの意味」

菊田 行住

「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくがさるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。」

(Ⅱコリント人への手紙1章4-5節)

「自分の今の苦しみに、何か意味があるのだろうか？出口の見えない困窮の中で、そのように考えられた方は多くいらっしゃるのではないのでしょうか。私たちは、理由や目的のはっきりした苦しみというのは、以外と耐えることができますが、反対に、その今の苦しみに、何も意味を見いだせない時、耐えることが出来なくなるのだと思います。また、始めは、自分の苦しみに目的を見いだしていても、その果たした労苦が、正当に評価されないと、やはり苦しみを受け入れられなくなってしまおうでしょう。

古来より、人間には「生老病死」の四つの苦しみがあると言われてきました。生まれること、年を取ること、病気をすること、死ぬこと。ここに、生まれること自体がすでに含まれていることは、なんとも感慨深いものがありますが、人生を少し長く生きてくると、思い当たることのあるのも事実です。生きるということは、それだけで労苦をとまなうものであることは、認めなくてはならないことであるでしょう。人生には、楽しく、喜ばしいことが多くある反面、どうしてもぶつかってしまう労苦は、やはりあるわけです。その時、私たちは、その苦しみの意味を、問いかけなくては、やり切れないのではないのでしょうか。

今回の聖書の箇所を記しているのは、キリスト教の信仰者の一人で、パウロという人物です。パウロは、やはり自らの人生の中でぶつかってくる苦難に対して、私たちと同じように、その苦しみの意味を、幾度と無く、問いかけたであります。彼の場合は、その問いかける相手が、イエス・キリストであり、その神でありました。言い方を変えれば、パウロは、誰もが一度は問いかけるはずの苦難の意味を、問いかける相手を、選択したのだと言えます。すなわち、パウロは、自分の人生の中で出会う苦しみを、問いかけることの出来る相手を、イエス・キリストに、探し当てたのだということです。

ある人は、自分の苦しみの理由を、親や家族、学校、職場の誰かに対して、向けることがあるかも知れません。特に、自分の親や家族に向かって、今の苦難の責任を追究することが、結構あるのではないかと思います。そこには、おそらく、それ相当の根拠を、他者の目から見ても、十分納得の行く理由を見出すことが出来ることも多いでしょう。しかし、そこにはどうしても、否定的な、マイナスの力が働く、苦難の原因探しに終わってしまうことになってしまうと思います。それでは、決してその苦難からは、解放されること

は無いでしょう。

パウロが選んだ、自分の苦しみを問いかける相手は、イエス・キリストとその神でした。他の誰か人間を、苦しみをもたらした根本的な原因とは、考えませんでした。ここでパウロが言っている苦難とは、具体的には、エフェソという町で捕まり、不当に処刑を受けるかも知れない状況に、1年近く置かれたというものでした。ですから、はっきりと不当逮捕と誤った拘束を与えている相手がいるのです。しかし、パウロは、それらの人を飛び越して、自らの苦難を、自分に課したのは、イエス・キリストの神であるとして、疑っていません（ヘブライ人への手紙 12 章 4-13 節参照）。実にパウロは、自分に苦しみを与えるのは、自分が信仰している相手からだと考えているのです。そこには、一見倒錯しているように見えますが、パウロは、自分に今の苦しみを与えるからには、何かしらの神の深い考えがあるのだというところに、賭ける思いで、信頼を寄せているのです。パウロはここで、その深い神の考えとして、その自分が受けた苦しみは、自分と同様な苦しみを受けた人々を、慰めるためだったのだと、受け取ります。パウロは、神が自分を通して、他の苦しんでいる人を、助けることが出来るようにするために、この死を覚悟するという類難をお与えになったのだと、信じたのです。

パウロは、ここで自分の苦しみの意味は、他の人を慰めることが出来るようになるためだったのだと、その苦難の目的を見出すことに成功しました。そしてその目的は、単に自分だけの目的ではなく、他者の慰めのためという、より大きな目的に仕えるものであり、自分個人の中で閉ざされたものではありません。広く他者に聞かれた、より大きな目的に連なる苦難の意味なのです。そしてパウロにとって、何よりも、その開かれた、他者のいのちを生かすための目的は、神御自身の目的に仕えるものです。このことは、たとえ自分の労苦が他者に認めてもらえなかったとしても、すべてを司り、すべてをご覧になっている神によって知られているということが、慰めとなります。他の誰も認めてくれなくても、神さまだけは、御自分の目的にそって、働く者であるとして詰めてもらえることが、パウロにとって何よりも喜びとなるのです。

日本にも、「悲心抜苦」という言葉があります。これは、同じ悲しみを経験した者の心だけが、相手の苦しみを抜くことが出来るという意味です。私たちは、本当に悲しむ人を慰めたいと心から願っても、それがままならないことが多いと思います。特に深い悲しみに捉えられている人には、掛ける言葉が見つかりません。その様な悲嘆の底にある人を、もう一度立ち上がらせることが出来るのは、同じ悲しみ、あるいはそれ以上の痛みを味わった者が、共に泣くことでしかないでしょう。他の誰にも手が出せないのです。そしてもし、相手の深い悲しみを、癒やすことが出来たのなら、自分の過去の苦しみに、大いなる意味を見出すことが出来ることでしょう。自分の苦しみを無駄に終わらせることなく、他者を救い、生かすために用いたいと、私は思います。自分の苦しみを、意味あるものに出て初めて、その過去の痛みから解放されるのだと思います。イエス・キリストの神は、何の意味もなく、私たちに、苦しみや悲しみを与える様な方ではないと、私は信じています。